

日高國志料 沙流郡之部

言



北海道拓地殖民ノ問題大ニ世人ノ耳目ニ上リ或ハ狀況視察
 トシテ或ハ企業調査トシテ來遊スルモノ年一年ニ加ハリ毎ニ地方ノ沿
 革、産物、統計等ノ調ヲ求ムルモノ多ク應答ノ類ナルカ故之ヲ以テ双者
 ノ便覽ニ供ス且ツハ舊事古跡ノ星霜ヲ經ルニ隨フテ湮滅シ又維新前ノ
 蝦夷狀景ヲ悉知セン古老漸ク世ヲ易ヘ亦尋ヌヘカラサルニ至ラントス
 依テ今ニ於テ古今ノ事實ヲ蒐集編纂シ以テ後ノ參考ニ資セント欲スル
 微志ニ出ツルナリ
 然ルニ予無學不才特ニ材料甚々乏シタ探究ニ由ナシ依テ今之ヲ活版ニ
 附シ識者ヲ教テ乞ヒ漸次校正増補シ誤謬ナキニ近キモノヲ編纂セント
 スルニアリ希クハ有識ノ諸彦示教アラソフヲ
 一前述ノ如クナルヲ以テ未タ大方ノ覽ニ供スル能ハサルハ素ヨリ論ヲ俟

タサルモ殊ニ纒カニ十數日ノ間ニ纂輯セシモノナルカ故ニ記事頗ル拙劣ニシテ亦誤謬疎漏アルヲ免カレス覽者幸ニ之ヲ諒シ事實ニ違フモノ又ハ遺漏ノモノアラバ垂示アラシムヲ希望ス

一風俗、産物ノ種類名稱及製造法等ハ各郡畧ホ同一ニシテ殆ト異ナラサルヲ以テ總括シテ浦河郡ノ首ニ記述スルモノトス

一統計ニ關スルモノニシテ特ニ年月ヲ記セサルモノハ明治二十四年中ノ事實ニシテ現在ニ係ルモノハ二十四年十二月ノ事實ニ據ルモノトス

明治二十五年八月二十五日

編者識

正誤

- 目錄人物 荒井五三郎 誤
- 三頁上段四行 蕁麻 正
- 四頁上段四行 土人六
- 十二頁上段四行 求ムルニ至リ一大産物タリ
- 十九頁二行 北海隨筆云々ハ
- 十九頁下段十一行 土人小ノ傳
- 二十三頁五行 誠メテ
- 廿六頁上段一行 專
- 全 四行 商
- 全 下段二行 鹿兒島
- 全 八行 藥餅
- 荒井直三郎
- 蕁麻
- 土人云
- 求ムルニ至リ一大産物トナレリ
- 上段續蝦夷草紙ニ曰ク云々ノ次ニ入ル
- 土人ノ小傳
- 誠メテ
- 商
- 鹿兒島
- 藥餅

日高國志料

沙流郡

一地理

沙流郡ハ日高國ノ西端ニアリテ東新冠郡ニ隣リ
 西膽振國勇拂千歲二郡ニ界シ南ハ大平海ニ面シ
 北石狩國夕張、空知兩郡及十勝國河西郡ニ接シ
 其形チ恰モ戰斧ノ如シ東西凡六里二十一丁南北
 凡ソ十四里七丁ニシテ其面積八十六方里四分ナ
 リ

沙流嶽ハ郡ノ北端ニアリ日高石狩、十勝三國ニ
 跨リテ屹立シ高凡ソ四千四百尺ナリ其左右峯
 巒屏ノ如ク相連リ日高國ト石狩或ハ十勝國ニ向
 背シ其國境ヲ分界ス其他ハ高山峻嶺ナシト雖モ
 國境諸峯ノ支脈ヨリ數多ノ丘陵逶迤トシテ海濱

ニ走レリ

三河川

本郡ノ河流ハ大抵源ヲ北境ニ發シ南流シテ海ニ
 注ク沙流川ハ長サ三十四里三十三丁ニシテ源ハ
 沙流山ヨリ發シ幌去、長知内、二風谷、平取、荷葉
 平賀ノ諸村ヲ經テ佐瑠太村ニ至リ海ニ注ク流末
 ハ幅七十間ニシテ數里ノ間刳舟ヲ上下スベシ門
 別川ハ源ヲ荷葉摘村ノ山奥ヨリ發シ門別村ニ至
 リ海ニ入ル長サ十二里九丁川口ノ幅十五間ナリ
 波惠川ハ波惠村ノ北山谷ヨリ發シ長サ八里十三
 丁ニシテ海ニ入ル川口ノ幅八間トス、慶能舞川
 ハ源ヲ慶能舞村ノ奥山ヨリ發シ長サ六里九丁ニ
 シテ海ニ入ル川口幅六間ナリ賀張川モ賀張村ノ
 山澤ヨリ發シ四里七丁ニシテ海ニ入ル川末ノ幅
 六間ナリ厚別川ハ菜實村ト新冠郡大狩部村ノ界

ヨリ發シ沙流新冠ノ郡界ヲ流レ厚別村ニ至リ海ニ注ク長サ十二里十四丁流末ノ幅二十五間ナリ此川數里ノ間丸木舟ヲ通ス支川比宇川ハ新冠郡比宇山ヨリ發シ同郡比宇村ニ至リ本流ニ合ス

四村 數

郡中十八ヶ村ニ分ツ即チ左ノ如シ

佐瑠太村 原名サロベツベツ茅多キ川ノ口ノ義

佐留川ノ下流ニ沿フ

富仁家村 原名トンニカラア檜樹ヲ取ル處ノ義

佐瑠太村ノ東ニアリ同村ヲ距ル一里

平賀村 ヒラカハ崖上ノ義佐瑠太村ノ北西ニアリ同村ヲ距ル一里

紫雲古津村 シユウウンコツハ鍋谷ノ義、平賀村ノ北ニアリ同村ヨリ一里

荷葉村 ニナハ薪ヲ負フノ義、紫雲古津村ノ

門別村 原名モベツナリ小川又靜カナル川ノ義、南海ニ面シ佐瑠太村ノ東ニアリ同村ヨリ一里七丁五十五間一尺

波惠村 原名アイ刺ノ義、葦鹿ノアル所門別村ノ東一里ニアリ

慶能舞村 原名ケニヲマイ黄花慈姑ノ義、波惠村ノ東一里ニアリ

賀張村 原名カバルシユ暗礁ノ義、慶能舞村ノ東三十二丁四十五間四尺ニアリ南海ニ面ス

厚別村 本名アブベツ魚ヲ捕ル川ノ義、賀張村ノ東一里ニアリ

菜實村 厚別川ノ上流ニシテ慶能舞村ノ北ニアリ厚別村ヨリ三里二十七丁三十間

五温 度

北ニアリ同村ヨリ一里

平取村 ビラウトリハ兩崖ノ間ノ處ト云フ義

二風谷村 平取村ノ東北ニアリ同村ヨリ一里

荷負村 ニオイハ樹木多キ處ノ義、佐留川ノ

西岸ニシテ荷葉摘村ノ北ニアリ二風

谷村ヨリ三里

長知内村 原名オサツナイ濁川ノ義、二風谷村

ノ北ニアリ同村ヨリ二里

貫氣別村 ヌアキベツハ濁川ノ義、荷負村ノ東

北ニアリ同村ヨリ一里

幌去村 ポロサラハ夥多ノ茅ノ義、佐留川ノ

上流ニシテ長知内村ノ西ニアリ同村

ヨリ一里、

荷葉摘村 荷負村ノ南ニアリ貫氣別村ヨリ三里

明治二十四年中門別村ニ於テ觀測セシ温度左ノ

如シ但シ午前十前ト午後二時ノ觀測ニ係ル

月	最高	最低	平均
一月	四十四度	十八度	三十二度六
二月	四十八度	二十度	三十七度三
三月	五十五度	廿八度	四十四度三
四月	五十六度	四十二度	四十九度
五月	六十六度	五十二度	五十九度
六月	七十六度	六十八度	六十六度
七月	八十二度	七十八度	七十二度
八月	八十八度	八十六度	七十四度
九月	八十八度	八十二度	七十一度
十月	六十八度	六十二度	六十一度七
十一月	六十八度	二十八度	四十六度七
十二月	三十八度	十六度	三十三度七

六沿 革

沙流郡ハ往昔ヨリ蝦夷等稱シテ第一ノ都府トナシ隨一ノ酋長此ノ地ニ居ル故ニ本土ノ夷人ハ種族正シク品格高尚ニシテ言語亦タ乱ラズ他ノ夷人皆ナ頗ル之レヲ尊敬セリト而シテ戸口ノ多キ實ニ全道第一ニシテ勇敢ナル此ノ地ニ勝ルモ

ノナシト云フ特ニ源義經ノ來リテ夷人ニ諸藝ヲ
 教ヘタリト云フ傳説アリ依テ舊記古書ニ存スル
 本土及義經ニ關スルモノヲ左ニ採載シ參考トス
 北海道志ニ曰 佐瑠は蝦夷創業の地（土人六
 女神初て此に來ど）土人稱して都會と爲ま故
 を以て戸口の多き獨り全島と冠たり

蝦夷奇觀ニ曰 沙流の山奥は往昔より能く古
 事を傳へ繼げる家有るの主人を「ヤリハル」と
 云ふ此者の云傳ふる所此蝦夷が島はむかし島
 造の神の作り給ひて其後いつとなく神去り給
 ひ神の跡もなく人も亦往ざりし時は南の方神
 の御國より女神一人空船に乗せ奉りて此島根
 をさして流しけるが其船此地の静内と云へる
 所に漂着し岩角と當り碎けたる中よは黄金
 白銀珠玉器財錦帛其外山の如くに積てありけ

を以て鼻祖となせども何の頃よか年曆詳なる
 事を得ま傳へ云ふ往古上方よりやんおとなき
 上臈の東部染退の海岸へ一葉の艇は浮びて漂
 着したりしが食物なくして殆んど飢渴を及ひ
 ぬるよ其邊りに居たる白き犬のかの上臈の飢
 たる有様を見何處よりか食物を運び來りて朝
 タよ介抱しける上臈は犬の爲に養はれ其所に
 光陰ををくるほどにいつしか身おもりて十月
 を經産なしたるは男子なり其嬰兒を「アイノ」
 と呼ひなせり（中略）奥州南部の宮古はいよし
 へ都方より配謫されし貴人の住めるを以て宮
 古とは名付たるなるべしと彼の上臈もまゝら
 わたりより東部の染退へ漂流したるものなら
 ん云々建久の頃源判官義經鎌倉右幕府の爲に
 内地に身を容るよ所なく蝦夷が島に渡り今の

るよ女神岩室までもあらば入て雨露をしのが
 ばやと思召し給ひけるに一疋の雄犬來りて女
 神に近き馴染ぬるに裾袂などを喰へて引行け
 るに大なる岩窟の内よ引入れ樹の菓草の實を
 くわへ來り又は清水のある所へ引もき渴を潤
 させらるに女神も今は此犬をたのみよ日月を
 經給ひしが何時となく御腹太らせ給ひ不思議
 や十月よ當る其月に男女の兒二人を産給ひて
 自ら清水よ浴させ給ひ養育なし給ふよその兒
 跣足にして山野を駆け歩き海岸に奔走して岩
 角を傳ひ樹木に登るよの業尋常れ人間とは異
 なりし此二人の中よ子を産みそれより其子孫
 此島に榮へけるとかや故よ父は犬の種にして
 母は女神の末なりと云傳ふるなり
 東蝦夷夜話に曰 蝦夷の開基は「オキクルミ」

沙流領の「ハイノサウシ」と云ふ所よ止まり弓
 矢を以て鳥獸を捕り地を租きて粟稗を播き食
 物となして數年此わたりよ住たりとあれば判
 官の古跡こゝかしよに残り神祠は沙流の會所
 許に勸請せざれば「オキクルミ」と稱するは彼
 の上臈のことよして判官には非を此邊の夷人
 は義經を判官とどのいへり
 東蝦夷日誌に曰 沙流領「ピラカ」村に行きこ
 名「ハフラ」此村人家二十四戸あり「ハフラ」
 は蝦夷第一の舊家なりといへり」の家に至る
 や懇懇に座を設け粟飯を炊て我等よ出ま其
 家筋の事等聞よ何一つ筆記もなければも鑿々
 として答へ別て感まべきは家の系圖と云ふも
 のを如此語りけるよ記し置くなり
 ○降神○神女○……………○……………

○イコンヌセ 妻アンレツテ ○……………○スサンリツクケ
 ○ハユートン 妻オロクテクル ○シヤールハラ
 ○ユリカン 妻インコロ ○イクワツテ ○ホロフシ
 ○ハーフラ 妻シユテソソ ○イタクマウリ
 ○シユツカトリ 妻アシリレハ ○エハシテ ○ウ
 ○セラン ○イチヤカアイ
 シヨン、パツチエロール氏曰 土人の説に其
 祖先は「オキクルミ」と云るものにて沙流地方
 土人の首府と稱する、有名なるピラトリ近傍
 の山中へ天降りし者なりといふ蓋し此天降勢
 しと云る時代は「アイヌ」が未だ日本人を知ら
 ざる時代なるべし扱此「オキクルミ」は「ト
 レシマチ」と稱する妻ありたりと土人此婦人
 を稱して「オキクルミ、トレシマチ」と云ふ即

ち「アイヌ」は此男女の間より出たる子孫なり
 と云ふ余は此「オキクルミ」と云ふ語を解釋せ
 るときは此傳説は勿論渠等の迷信にして信ま
 るに足らざるものとなき何となれば「オキ」と
 いふ語の意味は「爲せ」と云ふ義にして「クル
 ミ」と云ふ語(今は用ひざれども)は在昔日本
 男子を指用したるものなり故に「オキクルミ」
 といふ言葉の意味は「事を爲せ日本人」といへ
 る義なり又日本婦人を指し「クルマツタ」と云
 り此義は日本婦人と云ふ事なり「オキクルミ」
 の妻を指し「オキクルミ、トレシマチ」といふ
 事なり何となれば「トレシ」なる義は「妹」又は
 「處女」の義にて「マチ」を妻の義なればなり故
 に「オキクルミ」は在昔の日本人にして蝦夷地
 に来り土人と共に住居し彼等の姉妹を娶りし

者なるべしと思ふ前記の説に適合せる所の傳
 説あり則ち「オキクルミ」は往昔蝦夷地に来り
 教法、國法、藝術、裁縫、漁獵、及び毒箭を製せ
 る事又は彈弓を掛ける事を教へし者なりと
 云ふ去れば土人の所謂「オキクルミ」なる者は
 日本人の所謂九郎判官源義經なるやと思はる
 何となれば事實上行き証蹟多ければなり
 義經に就きたる事實は委しき事あれどもこゝ
 には略す(「アイヌ」記事)
 又曰 アイヌは彼等自身の本元に付て如何な
 る説をなきと雖も彼等の祖先が各地方(即外
 地を指す)より本土(蝦夷)より來りし來歴を深
 く推考するときは必きピラトリは古代の都よ
 して其酋長は殊更に尊敬せられ且其人の言葉
 は嚴重なるものにして威權ある命令の如きも

のなり若し彼等と何時までも一事を企てんと
 する時は必きピラトリの酋長に奏聞し其裁可
 を經て而して行ふなり然り而して或る軍事の
 將に起らんとせざるや其全軍の指令官として即
 ち大總督なり而して貿易せるときも亦沙流の
 酋長は其貿易隊の總監督として其人民を引率
 して獸皮或は魚類を以てサガレン島或は滿州
 へ往きて商買し食物或は飾り物即ち寶玉等を
 得て歸りしならん而して又時としては大洋中
 へ於て他國と交戦せしよと等もありしと云へ
 り云々(同上)

往古ヨリ蝦夷全島松前氏代々之ヲ領セリ
 寛文九年染退ノ酋長沙愚奢允乱ヲ作ス首メ「ハ
 イ」ノ酋長鬼義ヲ誘フ肯セズ沙愚奢允深ク之ヲ
 忌憚シ其不備ヲ襲フ鬼義奮戦シテ死ス(鬼義略

傳人物ノ部ニ出ス(依テ沙流ノ夷ハ皆ナ松前氏ニ屬シ能ク戰ヒ遂ニ之レヲ平ク○寛永九年東西蝦夷ノ地理ヲ測リ村名ヲ設ク○松前氏支配ノ時(年代不詳)本領ハ其家臣佐藤藤馬ノ菜邑ニシテ山田文右衛門ノ受負地タリ○明治元年松前德廣版籍ヲ返上ス四月函館ニ函館裁判所ヲ置キ五月函館府ト改ム○全二年七月八日開拓使ヲ置キ八月蝦夷ヲ改メテ北海道ト稱シ十一國八十六郡ト爲シ七領(佐瑠、新冠、靜内、三石、浦河、樺似、幌泉)ヲ併セテ日高國七郡(即チ現今ノ如シ)ニ分画シ十一月沙流郡ノ内彥根(會所元ヨリ東新冠郡境アツヘツ河中マテ)仙臺(會所元ヨリ西勇拂郡境フイハフ迄但會所元屬ス)ニ帶ニ支配セシム○全三年六月舊仙臺藩士七十七戸百四十六人官ノ保護ニ憑リ佐瑠太村ニ移住ス○全四年八月

二十日二藩ノ支配ヲ廢シ開拓使ノ管轄ニ歸ス○全五年九月浦川支廳ノ管理ニ屬シ沙流出張所ヲ門別村ニ設ク○全六年一月十八日日高十勝兩國ヲ十四區ニ分画ス全七年五月十四日浦河支廳ヲ廢シ本廳ノ主轄トナリ沙流出張所ヲ本廳出張所ト改ム、六月大小區画ヲ改定シ沙流郡ヲ第五大區トナシ三小區ニ分ツ○全八年二月二十五日出張所ヲ靜内郡ニ移ス○全九年四月十九日浦河分署ヲ浦河郡ニ置キ其管理ニ屬ス九月大小區画ヲ改正シ沙流、新冠、靜内、三石四郡ヲ合シテ第二大區トシ佐瑠太、富仁家、平賀、紫雲古津、荷菜、平取六村ヲ一小區トシ二風谷、荷負、長知内、幌去、貫氣別五村ヲ二小區トシ門別、荷菜摘、波惠、慶能舞、賀張、厚別、菜實七村ヲ三小區ト定ム○全十年三月十五日浦役場ヲ佐瑠太村ニ置ク○

全十二年七月郡區制ヲ編成シ勇拂郡役所ヲ勇拂郡苦小牧村ニ置キ勇拂、白老、千歲、沙流、新冠、靜内六郡ヲ管シ(十三年三月一日開廳ス)佐瑠太村ニ沙流郡各村戸長役場ヲ新設ス○全十五年二月廿八日開拓使ヲ廢シ札幌函館根室三縣ヲ置カレ本郡ハ札幌縣ノ管轄ニ屬シ郡制故ノ如シ○全十九年一月二十六日札幌外二縣廢止更ニ北海道廳ヲ置カル其布告左ノ如シ

布告第一號

北海道ハ土地荒蕪住民稀少ニシテ富庶ノ事業未タ普ク邊隅ニ及フコト能ハス今全土ニ通シテ拓地殖民ノ實業ヲ興クルガ爲ニ從前置ク所ノ各廳分治ノ制ヲ改ムルノ必要ヲ見ル因テ左ノ如ク制定ス

第一 函館札幌根室三縣並北海道事業管理局

ヲ廢シ更ニ北海道廳ヲ置キ全道ノ施政並集治暨及屯田兵開墾授産ノ事務ヲ統理セシム

第二 北海道廳ヲ札幌ニ支廳ヲ函館根室ニ置ク

本郡ハ本廳ノ直轄トナリ郡制舊ニ依ル○全二十年五月廿日佐瑠太村ニ勇拂警察署佐瑠太分署ヲ置ク六月二十三日浦河外十郡役所ノ管轄ニ移サレ分署ハ浦河警察署佐瑠太分署ト改ム○全二十二年十月廿四日戸長役場及浦役場登記所ヲ佐瑠太村ヨリ門別村ニ移轉ス(同月三十一日開所)分署モ共ニ移轉シ門別分署ト改稱セリ

七戸口

村名	本籍人		計	現住人	
	男	女		出寄人寄留人	現住人
佐瑠太	二〇一	一七三	三七三	一八七	二二〇
平賀	七五	五	一五二	八六	一七二

Table with columns for names (e.g., 紫雲古津, 荷葉, 平取) and numerical data. Includes a '計' (Total) row at the bottom.

沙流郡土人口増減

Table showing population trends for '文化六年' (Wenhuo 6th year) and '安政元年' (Ansei 1st year) with columns for '年号', '戸', '口', '男', '女'.

八 農 業

本郡ハ丘陵起伏スルヲ以テ廣大ナル原野ニ乏シト雖モ各川流ニ沿フテ兩岸平地アリ何レモ肥沃...

ナ耕作ニ從事シ精勵スルニ至ル又毎年多少ノ農

民移住スルモノアルニ至レリ○全二十四年七月

野鼠夥シク發生シ作物ヲ害スル頗ル多シ此年作

付段別ハ田一町五段畑四百四十一町九段ナリ

重要農産高

Table listing agricultural products (e.g., 米, 大豆, 小麦) and their yields for the years 二十二年, 二十三年, and 二十四年.

九 牧 畜

本郡ハ土地氣候共ニ牧畜ニ適スルヲ以テ良産馬地トシテ世人ノ知ル所トナリ特ニ駿逸ナル名馬能ク出ツルニヨリ競馬ニ飼立ツヘキ馬等ハ多ク當地ニ來リ求ムルニ至レリ一大産物タリ

明治十四年工藤作助平取村ニ牧牛場ヲ開ク其面積二百六十八町九段餘歩ナリ初メ作助郷里岩手縣下ニ飼養セシ和牛三十餘頭ヲ率入レ且短角改良種牝一頭眞駒内ヨリ拂下ケ之ヲ胤牛トナシ開拓使ヨリ資金若干圓拜借シ爾來專心一意蕃殖ニ精勵シ茅舎ヲ結ヒ殆ント畜牛ト坐臥ヲ同フシ其力行忍耐實ニ嘆稱ニ堪ヘサリシト十九年ニハ和種雜種合セテ百三十頭ト拜借ノ洋種牝牝十二頭ヲ飼育シ當時全道第一ノ牧牛場ト稱セラレタリシガ作助前年病死シ男其八業ヲ襲キ現今内國種

牝十頭雜種牝六十五頭牡三十三頭洋種牝十頭牡三頭ニシテ都合百二十一頭アリト○岩根靜一ハ明治十五年中新冠牧場ヨリ牝牝馬合テ百五十頭拂下ケ波惠村ニ地ヲ相シ全十九年一大牧場ヲ創設ス其面積百七十一町步餘ニシテ胤馬ハ雜種及純粹洋種ヲ拜借或ハ購入シ專ラ改良蕃殖ニ力ヲ盡シ(詳細傳ノ部ニ記ス)十九年ニ飼養ノ馬匹ハ四百四十頭アリ爾來年々良馬ヲ出シ又牧牛ヲモ兼テ二十四年末ノ現在ハ牛内國種牝一牡三雜種牝八洋種牝五牡一合計十八頭馬ハ内國種牝百六十三牡六十五雜種牝八十三牡四十九洋種牝一合計三百六十一頭ナリ○其他三四ノ私立牧場ヲ設置スルモノアリ何レモ漸次蕃殖シ且ツ陸軍省ニ於テ育成所設立ノ企テアリテ佐瑠太平賀兩村ハ西北ニ廣大ノ土地區画セラレタリ

二十四年十二月末現在家畜數ハ左ノ如シ

牛		馬		豚	
内種	四十九頭	内種	千六百四十八頭	牝	八十三頭
雜種	百〇九頭	外種	百二十二頭	計	二百六十六頭
外種	十頭	合計	千七百七十二頭		
合計	百六十八頭		九百廿二頭		
			二千七百〇四頭		

十 漁 業

本郡水産物中第一ニ算スルモノハ鱈トシ昆布鮭之ニ次ク昆布ノ蕃殖セシハ山田文右衛門ノ賜ト云フヘシ

北海道志曰 昔時沙流新冠邊海中昆布甚た少し歳々獲る所僅に五十石に満たむ函館の民山田文右衛門嘗て沙流海濱ニ抵り昆布の瓦缶

中に生るを見る始て人力以て繁殖せしむ可きを知り文久三年二月石の大一圍なるを勇拂より新冠に至るの海中に投せる大凡二万七千個翌元治元年三月人をして水に没して檢せしむる石多く沙泥に埋ま其重疊沙上ニ出る者は昆布之に生ま其質極劣て良し因て浮標を設け石船を湊合して一所ニ投せしむ是歳投せる所凡五万個慶應元年夏二百餘石を獲たり其質天然に異らむ文右衛門五畝を箱館奉行ニ呈せ奉行之を幕府ニ献て是歳又投せる五万餘個二年亦同し收獲三百八十石三年投せる七万個收獲五百六十餘石明治元年投せる若干收獲七百餘石爾後年々増殖して今に到れり

然ルニ近年海底ニ雜草繁茂シ昆布ノ生育ヲ害シ産額次第ニ減セリ又鱈漁ハ連歲不漁ナリシト云

フ本郡漁船ハ三年船七磯船六十二胴海船三持符船三十五丸木船三十三合テ百四十艘ニシテ漁網ハ鮭建網一鮭引網四鮭引網十統ナリ

重要水産物高

鮭	二十二年	二十三年	二十四年
鮭	一千四百一十石	二百石	七百二十石
鮭	八十二石	二十三石	四十五石
鮭	四百三十七石	二百三十二石	二百二十七石
鮭	六石	一石	四石
鮭	百八十二石	三石	百十五石

十一 商業

商業者ハ多クハ漁農業家カ兼業スル者ニシテ種類ハ日常必須ノ雜貨及米噌等ニ過キズ其物品ハ海漕スルモノアリト雖トモ概テ札幌ヨリ仕入レ苦小牧マテ馬車ニ積ミ夫ヨリ馬脊ヲ以テ輸送スルガ故ニ價格稍ヤ騰貴セリ一ケ年ノ商高概テ一萬五六千圓ナリ札幌ヨリ室蘭ニ至ルノ瀛車已ニ

通シ明年苦小牧ヨリ馬車道開クルニ於テハ物價大ニ低廉トナリ隨テ商業振フニ至ルナラン酒造家五戸アリ門別村ヨリハ頗ル佳品ヲ出シ灘伊丹ニ劣ラサルモノアリト二十三年度醸造高ハ清酒三百九十石餘濁酒十石餘焼酎三石餘ナリト云フ

十二 交通

郵便 明治十年二月佐瑠太郵便局(五等)ヲ佐瑠太村ニ設置シ全二十四年四月門別村ニ移轉セリ二十三年中信書取扱數ハ發信六千四百七通ニシテ配達ハ一万三百八十七通ナリト云フ
電信 未タ置局ナキヲ以テ頗ル不便ヲ感シ有志者等相應ノ献金ヲナシ門別村ニ電信局設置アラシメテ出願中ナリシ
陸運 道路甚タ險惡ナラスト雖モ丘陵起伏シ川

流ニ架橋ナキモノアルニヨリ馬車ヲ行リ難ク行旅及ヒ貨物皆ナ馬背ニ藉テ輸送セリ馬賃ハ通常一里八錢ナリ明治二十六年ニハ國道線ニ馬車道ヲ開鑿セラル、施計アリテ已ニ實測ハ完了セリト果シテ竣工ノ上ハ便益ヲ得ル實ニ鮮少ナラサルベシ
海漕 海岸線ハ緩漫ナル灣形ニシテ海底亦深カラサルヲ以テ船舶ノ安全ニ風波ヲ凌キ難キニヨリ入津甚タ稀レニシテ廿四年中瀛船二艘噸數百六十噸風帆船五艘噸數千二百二十五噸ナリ

十三 教育

學校三箇アリ一ヲ佐瑠太小學校トス佐瑠太村ニアリ公立ニシテ明治十二年九月ノ創立ナリ簡易科ニシテ教員一名生徒三十三名ナリニテ公立平取小學校トス簡易科ニシテ明治十三年九月創立

シ教員一名生徒五十名ナリ生徒ハ皆ナ舊土人ノ兒童ナルヲ以テ創設以來年々官ヨリ經費ノ補助ヲ仰クニテ公立門別小學校トシ又簡易科ニシテ門別村ニアリ明治十四年十一月ノ創立ニ係ル教員一名生徒三十二名ナリ本郡學齡兒童ノ數ハ三百卅八人ニシテ就學者百十五人不就學者二百廿三人ナリ此ノ不就學者ハ多ク土人ノ子弟ニアリト雖モ亦タ學校ニ隔絶スル村落多キヲ以テ通學スル能ハサル者アリ故ニ二風谷村ニ新ニ一ノ公立小學校ヲ設置セント目下計畫中ナリト云フ

十四 衛生

明治五年二月靜内出張病院沙流派出病院ヲ門別村ニ置ク○全九年四月十九日沙流病院出張所ト改稱ス九月十二日札幌病院沙流出張所ト改ム○全十一年一月官立病院ヲ廢シ更ニ公立沙流病院

ヲ設置ス○全二十三年五月公立病院ヲ廢シ村醫ヲ置ケリ

本郡ニハ風土病又ハ地方病ト稱スルモノナク獨リ間歇熱ノ時ニ發スルコト多カリシガ年一年ニ減少セリ二十四年村醫取扱患者總數ハ七百二十四人ニシテ内男三百九十七人女三百二十七人ナリ死亡數ハ四十八人内男二十九人女十九人ナリ

十五 租 稅

明治二十四年度租稅ハ北海道地租二十七圓五十二錢五厘醸造酒稅八百二圓七十五錢四厘蒸溜酒稅十三圓十錢一厘酒造免許稅八十圓煙草營業稅十圓全鑑札料六十錢日本形小船稅三圓牛馬賣買免許稅七圓水產稅三百八十九圓四錢四厘合計金千三百三十三圓二錢四厘ニシテ、地方稅ハ地租割五圓五十錢三厘戸數割四十七圓五十五錢商業

稅四十八圓八十七錢五厘雜種稅七圓三十錢七厘合計金百九圓二十三錢五厘ナリ最多額納稅者ハ飯田信三納金三百五十二圓武田寅藏納金三百四十六圓ナリト云フ

十六 村 費

明治二十五年年度豫算收入總高金八百五十一圓三十錢ニシテ其内譯營業割金百二十圓十一錢戸別割金三百二十九圓七十七錢三厘教育費雜入金百四十八圓衛生費雜入金二百〇六圓八十三錢教育費寄附見込金四十二圓前々年度ヨリ繰越金二圓五十八錢七厘ナリ支出ノ部ニ於テハ金四百六十五圓三十錢教育費金三百十六圓衛生費金七十圓土木費合計金八百五十一圓三十錢ニシテ賦課高ノ負擔ヲ一戸ニ平均スル時ハ金一圓十五錢三厘餘一人ノ平均金二十一錢五厘餘ナリ又負擔最モ

多額ナルモノハ一戸金三十四圓三十九錢九厘ニ

シテ最モ寡額ナルモノハ金四十七錢ナリ

十七 齋 蹟

義經舊趾 平取村字「ハヨヒラ」ニアリ沙流川ノ西ニ沿フタル崖上ナリ（「ハヨヒラ」ハ角アル崖ノ義ナリト往昔ヲキクルミガモ井即義經海洋ニ出テ角鮫ヲ捕リ其角ヲ溜メ置キシ處ナルニヨリ名ケシナルベシト又一説ニ「ハヨツペ」ハ鎧ノナルヲ以テ鎧ノアル崖ト云ヘリ）

東蝦夷日誌曰 義經城趾は「ハヨ平」に在り西岸高十餘丈奥州北上河の高館に似たり一小社あり毘羅取大明神の額を掲ぐ八十年前公の甲冑を著せし像あり今會所の下に在りど公高館を去り此地に渡り此川筋に城郭を作り時に爰に遊覽せど

北海道志に曰 義經城趾沙流川の上流「ハイ

」に在り其趾今存を故に此地の土人を「ハイクル」と稱せ「クル」は衆の義にして尊敬の意なり沙具沙允の乱に此地酋長鬼菱「ハイクル」の故を以て松前を叛かして沙具沙允と戦て死せ

又曰 源義經文治五年平泉の敗れ遁て蝦夷に入り波葬に居り威武を以て蝦夷を風靡せ是より蝦夷日本の威武に服せ後往く所を知らず源君美曰相傳ふ豫州幼なる時蝦夷に入り其酋長八面大王の女を通し其出獵を伺ひ藏せる所の秘書一卷を窃み去ると其事載て詞典中に在り今に至りて蝦夷常に之を唱へて感慨流涕を云々（中略）按るるに寛政中近藤守重滝仁瀧に至り夷長藏せる所義經の甲冑を觀る今記文を此よ

録を曰東夷吾妻部沌仁湯の夷長古兵器を藏せ
 云ふ源豫州の遺物なりと什襲寶愛珠玉を逾る
 有り予就て之れを視る鐵皮剝落し塵埃堆積を
 木を以て補綴し纒み其の彷彿を存せ兜形桃の
 如く半臉翁の如し紅絨縫穿し前後は草饅金甲
 裳鍔筋膊を覆ふ蓋兵家の所謂る鎧腹巻と云者
 なり嗚呼五百年來寶器醜夷の手より知らむ
 幾星霜なるを今日予輩に探訪せらるゝ者は實
 る寶器の幸よして豫州の靈想ふに當きよ氣を
 吐くべし沌仁湯を距る十里餘上武川、黃壘、車
 留、鎧平等の諸地は皆豫州の故居なり然らば
 則此器吾妻よ在る其理當さに然るべし而して
 豫州の遺物爲る疑ひなし因て歲月を題して鑑
 定の左券と爲せ

十八 神 社

に源廷尉を祭る蝦夷木幣を奉る享和二年夏比
 企市郎左衛門可滿廟を建て夷をして是を祭ら
 しむと

續蝦夷草紙に曰 沙流紋別と云ふ處よ於て乙
 名どもの話を聞くに昔源廷尉義經朝臣辨慶の
 兩將には沙流の川上なる「ハイヒラ」と云ふ處
 よ居て枯木と鶯の嘴とを多くわつめて柵とな
 し又下鵝川「キロ、サ」山中へ往來せし云々
 鬼菱宅趾 沙流郡波惠ニ在リト北海道志ニ見フ
 レドモ所在今詳カナラズ
 稻荷神社 門別村ニ在リ祭神保食神明治九年二
 月建立全年三月村社ニ列セラル
 多賀神社 波惠村ニアリ村社ニシテ祭神伊邪那
 美神明治四年創建ス
 大神宮社 佐瑠太村ニアリ無格社ニシテ祭神天

義經社 祭神伊豫守源義經ニシテ寛政三年山田
 文右衛門建立ス明治九年二月村社ニ列セラル神
 体ハ義經ノ甲冑ヲ裝ヒ弓箭ヲ携ヘタル二尺許ノ
 木像ニシテ近藤守重比企可滿ノ寄附ニ係ル者ナ
 リ木像ノ裏ニ寛政十一年己未四月廿八日近藤重
 藏藤原守重、比企市郎右衛門藤原可滿ト刻ミ底
 ニ江戸京橋佛工師 ト記セリ社ハ元ト平
 取村字ハヨヒラ山ニアリシカ明治二十一年出水
 ノ節山崩レ社宇皆ナ沙流川ニ流レ去リシ時ニ土
 人ノ頭ヘンリウクト云フ翁神体ヲ搜索セシニ佐
 瑠太海岸ニ於テ流木ノ上ニ坐スルヲ認メ取テ改
 メ見ルニ聊カモ損所ナク之ヲ携ヘ歸リ平取村部
 落ノ北ノ山上ニ一小社ヲ建テ今茲ニ祭レリ
 北海道志よ曰 義經社沙流郡平取村ニ在リ村
 社祭神源義經東蝦夷地名考よ佐瑠の山中篠莖

照大神明治九年二月十六日創建ス

北海隨筆に曰 東蝦夷地沙流と云ふ處に源判
 官義經の社と云ふ有て祭るよしなり則強夷「
 オニヒシ」と云ふものゝ村は則此の沙流と云
 ふ處より出てり」と云ふ

十九 寺 院

従前ヨリ本郡ニ寺院ナカリシガ門別村ニ新ニ眞
 宗本願寺ノ末寺ヲ創立シ寺号照順寺ト公稱シタ
 キヨシニテ今出願中ナリト云フ

二十 人 物

北海道志ニ載スル所ノ古昔土人小ノ傳ハ左ノ如シ
 鬼菱 鬼菱ハ波舞ノ酋長ナリ身幹長大趨捷多力山谷ヲ
 上下スルヲ飛ガ如シ嘗テ沙具沙ノ家ニ往キ其奸
 謀ヲ聞キ謂ラク難テ其害ヲ除カント是ヨリ病ト

稱シテ往カズ沙具沙深ク之ヲ憚ル坑首文四郎ハ
 松前ノ眷遇ヲ受ル者ナリ沙具沙ノ婿莊太夫ト善
 クシ其家川ヲ隔テ沙具沙ノ壘ト相對ス適々通辭
 勘右衛門松前ヨリ來ル鬼菱聞テ二人ト謀ラント
 欲シ一僕ヲ從ヘ密ニ文四郎ノ家ニ至ル沙具沙ノ
 黨候テ之ヲ知ル沙具沙衆二百ヲ遣リ川ヲ濟テ文
 四郎ノ家ヲ圍ミ呼テ曰鬼菱ヲ出サレハ燒ント鬼
 菱文四郎ニ言テ曰今日天命窮ス願クハ一條槍ヲ
 借テ圍ヲ脱セント文四郎力ヲ戮セ共ニ死セント
 ス鬼菱肯カス曰一人ノ故ヲ以テ禍ヲ衆人ニ遺サ
 ハ松前大守ニ何ト言ント僕石伴從ント請フ許サ
 ス強テ後事ヲ命シ之ヲ文四郎ニ託シテ出戰ヒ圍
 ヲ潰シテ奔ルト里餘削ヲ被テ地ニ僵ル賊其趨捷
 ヲ畏レ敢テ近カス鐵ヲ擲メ射テ之ヲ殺ス賊又文
 四郎ノ家ニ入り石伴ヲ索ム石伴櫃中ニ匿ル賊率

出シテ去ル沙具沙之ヲ放還シ歷判ヲ與フ歷判ハ
 過所ノ謂ナリ石伴出羽ニ歸ラントシ路ニシテ飢
 ニ沙具沙設ル所ノ關ニ抵リ歷判ヲ示シテ食ヲ乞
 フ關夷之ヲ憫ミ留テ奴ト爲ス沙具沙事ヲ舉ルニ
 及テ文四郎ヲ遣リ獅子嶽ノ險ヲ塞カシム文四郎
 鎧夫三百餘人ヲ率テ獅子嶽ニ抵ルト詐リ第二三
 ノ關ヲ過キ直ニ末瀬川第一ノ關ニ至ル守夷恐怖
 シ舟ヲ鑿シテ逃ル石伴夷中ニ在リ夜竊ニ夷長志
 角島ノ頭ヲ斬リ來テ文四郎ニ示シ且ツ舟ニ柁シ
 テ濟リ盡ク其舟ヲ奪フ後ニ沙具沙遺ル所ノ會臨
 蒙勢等此ニ至リ渡ヲ得ス衆遂ニ潰散ス文四郎已
 ニ濟リ松前ノ將士ニ謁シ具ニ石伴ノ事ヲ言フ松
 前其勞ヲ賞シ鬼菱ノ後ヲ嗣カシム石伴其妻子ヲ
 助ケ其家ヲ經紀ス死生相背カザル者ニ庶幾シ

仁徹羅多允

仁徹羅多允ハ佐瑠ノ酋長ナリ貌矮然ルニ甚タ威

門別村

飯田信三天保十三年十一月生

カアリ吐美加羅允之ヲ侮リ曾テ松前ニ出ルニ告
 ケスシテ往ク仁徹羅怒テ其罪ヲ責ム吐美加羅允
 其威ニ服ス

志阿奴

志阿奴ハ佐瑠領紋別ノ土人ナリ早ク父ヲ失ヒ母
 瘡疾アリ兄智多頼、足痿立ツ能ハス志阿奴奉養
 怠ラス嘗テ石狩秋漁ニ當リ其家ヲ離ル、遠キヲ
 以テ豫メ母ノ衣食ヲ備ント欲シ山ニ入り熊ニ傷
 ラル何旬シテ家ニ歸ル其母ヲ驚スヲ恐レ痛ヲ忍
 テ臥ス近隣來テ之ヲ扶助シ會所亦米酒ヲ與テ之
 ヲ憫ム且其平素老實親ニ孝ナルヲ以テ官吏之ヲ
 箱館奉行ニ開シ米若干ヲ賜フ

本郡ニ於テ現今ノ有志家名望家ト稱セラル、人
 物ノ小傳左ノ如シ

氏ハ元近江國坂田ノ人幼ニシテ父ヲ亡ヒ歲僅カ
 ニ十二ノ時竊ニ家ヲ出テ京都知釋院ニ客食シ後
 江戸ニ遊フ數年志ヲ滿ス能ハス歸テ農事ニ從
 フ文久三年大和ノ變アリ彦根藩某ニ隨フテ行ク
 乱平ラギ歸郷ス此年亦母ヲ失フ農業ハ素ヨリ喜
 ハサル所ナルヲ以テ亦出奔シ是ヨリ諸國ヲ遍歷
 シ放蕩無賴居所常ナクシテ定メナキ業ヲ事トシ
 明治元年一時歸國セシニ兄痛ク憤リテ檻ヲ造リ
 押込ミタリ時ニ京師ニ戰亂起リタルヲ聞キ此機
 ニ乘シ一功名ヲ試ミント之ヲ脱シ京都ニ出テシ
 ニ官軍東征ニ會ス此ニ於テ彦根藩士某ノ夫卒ト
 ナリ東奥各地ノ軍ニ從ヒ十二月國ニ歸ル後彦根
 藩ヨリ褒賞トシテ一人扶持ト金若干ヲ賜フ又東

京ニ出テ流寓ス三年彦根藩北海道沙流領ノ内ヲ支配シ開拓ノ爲メ多ク人夫募集スルヲ聞キ勇ンテ其募ニ當リ約スルニ三ヶ年ヲ以テ稼方トシテ四月門別村ニ渡來シ漁業或ハ耕作ノ人夫ニ役セラル五年二月支配地ハ開拓使ヘ引繼キトナリ藩吏ヲ始メ人夫等皆ナ歸國セシガ此時本地ニ永住スルニ決心セリ(先ニ募集セシ人夫二百三十四人ナリシガ此時残りタルハ僅ニ六人ナリト云フ)而シテ先ニ彦根藩支配地主任某ノ内示ニテ氏ト外兩人ノ名義ヲ以テ漁場及昆布濱ヲ出願シ某ハ此ノ事業ヲ開キタリ三月開拓使ヨリ人夫鉄頭ヲ命セラレ傍ヲ某ノ漁夫トナレリ此年及翌六年トモ豊漁ニシテ某ハ多クノ利益ヲ占メタリシヲ以テ益々手ヲ廣ケ奇利ヲ博セントセシニ七年ハ不漁ニテ收支相償フ能ハサルノミナラズ負債頓

ニ萬ヲ以テ數フルニ及ヒテ一敗産ヲ傾ケタリ時ニ氏ハ漁場主ノ故ヲ以テ債主ノ催促頗ル嚴ナルニ遇フ(ル一人ハ先ニ持主ノ名義ヲ脱セリ)函館ニ出テ債主ニ事情ヲ明シ切ニ哀ヲ請ヒ某ニ係ル負債ヲ引受ケ五ヶ年賦ニテ消却スヘキ約ヲナセリ然ルニ鯉漁場七ヶ所ト昆布濱七ヶ所ノ業ヲ營ムニハ少カラサル資金ヲ要スルニヨリ非常ニ苦心シ百方奔走金品ヲ借リ集メ漸ク八年營業セシニ僥倖ニモ此年ハ實ニ稀ナル大漁ニテ莫大ノ収利アリ依テ年賦金ノ過半ヲ一時ニ返却シ尙剩餘アリシカバ進ンテ巨利ヲ博セント九年ニハ漁場二ヶ所ヲ新タニ開キ且ツ牧畜事業ニ着手シ馬二十頭ヲ購入シ蕃殖ヲ計レリ然ルニ此年ハ前年ニ反シ未曾有ノ薄漁ニシテ忽チ多額ノ負債ヲ醸シ本業ヲ維持シテ之ヲ挽回スヘキカモナク他ニ圖

ルヘキ策ナキニ究シ舊漁場悉ク賣却シ僅カニ負債ノ半ヲ擲メタルニ殘ル漁場二ヶ所ハ新開ノミナルヲ以テ收益ノ見込十分ナラサルモ自ラ必死ニ勉勵セント着業セシニ此年モ(十年)亦不運ニシテ不漁ナリシカバ負債益々嵩ミ最早再興ノ策盡キ果テ愁嘆一方ナラザリシガ志ヲ決シテ家財器具ヲ集メテ悉ク之ヲ賣拂ヒ負債ノ幾分ニ當テ以テ債主ニ謝シタリシニ債主ハ大ニ其義心ニ感シ深ク其心情ヲ憫ミ殘額ハ五ヶ年賦ニ猶豫シ而シテ翌十一年ニ業ヲ爲スヘキ資金ヲ更ニ貸與セリ是ニ依テ感泣奮躍大ニ勇ヲ倍シ奮勉シタルニ豊漁大獲ニシテ利益ヲ得タルヲ實ニ夥數茲ニ於テ年賦金ハ勿論大小ノ借財悉皆消却シテ尙數多ノ餘贏アリ翌年ノ資金ニハ敢テ心ヲ勞スルナキモ經營周密ニシ最モ精勵セシカバ十二年モ辛ニ

シテ大漁アリ亦利益ヲ占ムル多額ニシテ特ニ此年ハ更ニ負債ナキ故ニ全ク純益トナリ始メテ神ヲ慰シ心ヲ安シタルニヨリ夫婦相携フテ父母ノ墓參ノ爲メ十二月(舊里近江ニ)歸省シ大ニ親族ニ惠ミ郷閭ヲ賑ハシタリト(先ニ誠メテ用ヒサルニヨリ兄ノ勘當ヲ受ケシガ後氏ノ實業ニ勉勵スルヲ聞キ屢々歸國ヲ促セリト)時ニ兄某ハ氏ノ錦ヲ飾リテ古郷ニ歸リタルヲ悦ヒ實ニ歡極テ涕泣セリト、其後年々引續キ相應ノ漁獲アリ利潤ヲ得ルヲ少カラズ家産次第ニ起リ身代益々鞏固ニナリ一朝ノ失敗蹉躓アルモ容易ニ家業ニ影響ヲ及スナキニ至タレリ十四年酒造業ヲ始メタリ此年蝗虫驅除世話係ヲ命セラレ十六年ヨリ自家ノ營業ハ大ニ擴張シ又十分整理セシヲ以テ新冠及苫小牧等他ノ漁場ニ仕入ヲ爲スニ至レリ

十八年屯田兵ニ於テ馬匹ノ入用アルヲ聞キ所有ノ馬二百七十頭ヲ献上ス廿年收稅委員ヲ命セラレ廿三年納稅委員トナリ又沙流郡漁業組合頭トナル廿四年村總代ニ公撰セラレ今各所ニ所有スル漁場ノ收獲高ハ毎年二千石ニ上ルト云フ
 氏ハ氣豪ニ膽大ニ驅幹亦偉大ナリ少壯ヨリ素行倭マラズ暴狀ニシテ無賴暴漢ノ魁タリシガ歳三十ニシテ本道ニ渡リ後志ヲ改メ心ヲ悛メ専心一意實業ニ精勵シ一日正ニ歸シ善ニ赴ク水ノ低クキニ走ルカ如ク艱難ニ處シテ能ク之ヲ耐ヘ辛苦ニ陥リテ能ク之ヲ忍ヒ信ニ百折屈セス千挫撓マズ遂ニ志ヲ達シ業ヲ成シ今ヤ巨萬ノ富ヲ保チ日高國第一ノ豪家タリ近年密ニ文筆ヲ學ヒ又身ヲ奉スル常ニ節儉ニシテ毫モ奢侈ニ流レズ殆ント奴婢ト衣食ヲ同フシ下ヲ憐レミ弱ヲ助ケ而シ

テ公共事業ニハ熱心ニ身ヲ入レカヲ惜マス財ヲ客マス周旋奔走恰モ自家ヲ理スルガ如ク其寄附義捐金ノ如キ實ニ枚舉ニ違アラス洵ニ奇特殊勝ノ行アルガ故自ラ郡中其篤行ニ感動シ義心ニ勸化シ皆緝睦ニシテ淳厚風ヲ爲シ各其業ヲ勉メ其職ヲ勵ミ更ニ遊惰ノ民ナシ故ニ氏ノ名聲大ニ舉リ州郡氏ノ名ヲ知フサルモノナク其德ヲ景慕セサルハナシト云フ
 波惠村士族
 岩根靜一 嘉永五年生
 氏ハ牧畜家ヲ以テ名ヲ博シ最モ馬種改良ニ頗ル熱心盡力シ現今沙流郡ノ産馬地トシテ全道ニ冠タリ特ニ駿逸ノ名馬能ク出テ競馬馬ハ沙流産ニアラザレバ必ス新冠産ニアリト世人ノ已ニ聽ス所ニ至リタルモノ氏與リテ力アリト云フ氏ハ元

ト淡路國洲本ノ人性活潑ニシテ勇敢ナリ明治四年三月稻田邦植ニ從ヒ靜内郡ニ移住シ目名村ニ地ヲ占シ茅屋ヲ結ビ同移住ノ青年壯者ト共ニ隊ヲ爲シ荊薊ヲ攘フテ開墾ニ從事ス時ニ器具完カナラサルヨリ奏効容易ナラザルヲ以テ馬耕ノ必要ヲ感シ五年一月札幌資生館ノ生徒トナリ六年二月上京農馬器械取扱現術修業ヲ命セラル八年四月西村開拓中判官ニ隨行清國へ派遣命セラレ各省ヲ巡回シ其十二月清國農民ヲ備入レ又綿羊ヲ購入シテ歸朝ス(今札幌郡丘珠村ニ歸化セシ許士泰范永吉等是時傭來リシモノナリト)九年二月札幌在勤トナリ十一年新冠牧場在勤トナル十四年民間ニ在テ自ラ牧畜業ヲ振作センコトヲ企テ退職シ十五年五月沙流郡波惠村(即現住地)ニ一大牧場ヲ設立シ躬ラ耒耜ヲ把リ荒蕪ヲ開キ斧

鋏ヲ携テ木柵ヲ造リ勞働ヲ厭ハス辛苦ヲ意トセズ専ラ心ヲ牧畜ノ繁殖ト馬種ノ改良トニ盡シ二十年産馬改良組合ヲ組織シ推レテ其頭取トナリ二十一年ニハ日高馬市會社ヲ創設シ亦其社長ニ舉ケラレ拮据盡力大ニ社運ノ隆盛ヲ見ルニ至レリ而シテ現今村總代人ノ公撰ニ當リ公共事業ニ就テモ奔走尽力スト云フ

門別村

前川 半造

天保十一年五月五日生

氏ハ性朴直ニシテ篤行常ニ勤儉ヲ旨トシ痛ク浪費ヲ戒メ粗服ヲ着更ニ華美贅澤ノ風ヲ好マズ然レトモ公共ノ事業地方ノ裨利タルヘキ事アルニ當テハ奮フテ財ヲ投シカヲ尽シ決シテ人後ニ立ツヲ欲セズト氏ハ滋賀縣犬上郡北青柳村ノ人家元ト農ヲ以テ業トナシ甚々貧シカリシヲ以テ行

專トナリ諸國ヲ廻歴セシガ明治三年彦根藩沙流郡ノ内ヲ支配シ開拓事業ヲ興ス爲メ多ク人夫ヲ募集スルニ會シ則チ其募ニ應シ全年四月渡航シ商ヲ開耕ニ從事セシニ翌四年諸藩ノ支配免ラレ開拓使ノ管轄トナリ藩吏引上ケ募移ノ漁農者各離散スルニ至リ思ラク一度志ヲ決シテ本道ニ來リ今空シク歸國スルヨリ此地ニ在テ奮發シ一事業試ミント決意シ豫テ給料ノ内蓄ヒ置キタル纒カノ貯金ヲ資トナシ門別村ニテ雜貨ヲ商ヒ傍ヲ昆布ヲ採取シ節儉ヲ守リテ非常ニ勉強セシカバ資金次第ニ加殖セシヲ以テ十八年ニ至リ鯨漁業ヲ創メ又牧畜業ヲ起シタルニ皆ナ能ク利潤ヲ得今ヤ家産大ニ増嵩シ萬ヲ越フル富ヲ保テリト云フ實ニ勤儉ノ効著シキモノト云フベシ

門別村

ヲ給セルヲ以テ藩吏多ク歸國セシモ氏斷然意ヲ決シテ土着シ六年八月札幌資生館ニ入り修學ス七年廢館ニ付歸郡八年門別村ニ家屋ヲ營構シ旅人宿營業ヲ始ム當時郡中民家ハ何レモ仮小屋ニシテ茅屋草舎ニ過キサリシガ内地風ノ木造家ヲ建築シタルハ實ニ之ヲ以テ嚆矢トナス十三年牧畜業ヲ起シ繁殖改良ヲ目的トシ現今良馬七十餘頭ヲ飼育セリ十六年村總代人ニ當撰シ今尙勤績シ能ク地方ノ爲メ奔走尽力シ諮問會或ハ昆布聯合組合會議等アル毎ニ推レテ委員トナリ郡ノ代表者トシテ能ク其任ヲ全フスト云フ

門別村

武田 寅藏

天保十三年五月生

氏ハ元ト近江國坂田郡宮田村ノ人ナリ明治三年彦根藩沙流領ノ内ヲ支配開拓スルニ當リ其募集

中山 武二 嘉永元年九月生
 氏鹿島縣士族ニシテ會テ海軍及陸軍ニ際ヲ以テ奉仕シ明治五年七月開拓使御用係トナリテ本道ニ赴任シ自後白老、勇拂、小樽、苫小牧等ノ各病院ニ在勤シ今沙流郡各村々醫タリ資性温厚篤實ニシテ病患ノ報アレハ貴賤貧富ヲ分タズ路ノ遠近ニ拘ラス直ニ往テ診察施療シ常ニ患者ヲ見ル懇切叮嚀ニシテ貧究ニハ菜餌ヲ施シ又藥價滯納スルモノアルモ之ヲ督促セスト眞ニ氏ノ如キハ所謂仁術ノ業ニ忤ラサル人ト云ヘシ

門別村士族

小島 規矩夫

嘉永三年二月七日生

氏ハ舊彦根藩士ナリ明治三年同藩沙流郡ヲ支配スルニ當リ撰ハレテ本郡ニ在勤シ漁業及農業ノ監督ヲ司リシカ四年開拓使ノ管轄ニ歸シ官旅費

ニ應シ四月渡航同藩支配ヲ罷メラル、際永住者トナリ豫テ給料ノ内ヲ節儉シテ蓄ヘ置キタルヲ資金トナシ商業ヲ營ミ勤儉ニヨリ漸次資産ヲ造リ十年ヨリ漁業ニ着手シ十三年ヨリ酒造業ヲ兼テ又牧畜ヲ經營シ家産次第ニ起リ今ヤ萬ヲ以テ算スルノ富アリ常ニ虚飾ヲ戒メ節約ヲ守ルト雖モ公共ノ事ニ就テハ相應ノ義務ヲ盡シ學校病院等ニ寄附セシモノ數百圓ニ達スト云フ

佐瑠太村

荒井 直三郎

天保元年五月生

氏性温順誠實ニシテ志剛ニ行篤シ早クヨリ本道ニ來往シテ事情ヲ詳カニシ移住ノ後専ラ農事ヲ勵ミ且ツ村方ノ事柄等懇切ニ世話セシニ依リ村民大ニ信重スト氏ノ履歷ハ左ノ如シ
 元ト仙臺藩士ニシテ安政四年五月三好某ニ隨ヒ

東蝦夷巡視國後ニ至リ十一月歸藩五年三月槍士トシテ東蝦夷白老陣屋へ在勤六年八月歸藩万延元年三月再ヒ白老へ砲術方トシテ在勤五月勘定方ヲ兼テ擇捉島巡回九月白老ニ歸陣文久元年五月北蝦夷唐太クシユンコタン在勤命セラレ八月更ニ白老在勤トナリ慶應三年迄勤務時ニ奥羽同盟軍起ルヲ聞キ明治元年八月尙ニ白老ヲ脱シ十月歸藩セシニ巳ニ軍敗レ降伏ノ後ナリシト三年沙流郡佐瑠太村ヲ仙臺藩支配ノ際開拓管事トナリ七月佐瑠太村渡航後開拓使ノ管轄ニ屬シ引繼後同村ニ移住農ニ歸ス五年二月士族頭與命セラレ六年九月副戸長拜命十二月辭職十年沙流郡々總代ニ十二年八月虎列剌病豫防説諭方ニ十五年五月蝗虫驅除世話掛リニ六月學務委員ニ八月衛生委員命セラレ十七年四月沙流郡各村蝗世話係

ニ十八年五月沙流郡舊土人農業教授補助命セラレ廿二年八月公撰ニ據リ村總代トナリ尙其職ニアリ今農業ニ旅人宿業ヲ兼テ驛傳取締人タリ
佐瑠太村
石川 仁兵衛 弘化三年九月生
氏ハ元ト仙臺藩士ナリ明治三年沙流郡佐瑠太村ヲ仙臺藩支配ノ時同藩ノ旨意ニ從ヒ其二月本郡ニ渡來初メ此地ニ於テ製鹽ノ計畫ヲナセシガ成ラズシテ廢シ木挽職取締トナル四年該藩支配ヲ罷メ開拓使へ場所引繼ノ際土著農業ニ從事ス十二年七月郵便取扱ヲ命セラレ驛傳取締ヲ兼ヌ十二年七月四等郵便取扱ヲ十七年蝗虫驅除世話掛ヲ十七年學務委員ヲ十八年又蝗虫世話掛ヲ命セラレ十九年五月三等郵便局長ニ任セラレ今尙勤續シ廿三年ヨリ鯉漁業ヲ始ムト氏ハ誠實ニシテ

能ク耐忍シ奇特ノ行爲鮮トセズ故ニ民望ヲ保チ本村屈指ノ資産家ト稱セラル

平賀村

小林 善助 安政二年六月九日生

氏舊仙臺藩士ニシテ明治四年奮テ本道ニ入り有珠郡紋鼈村ニ移住シ十二年四月新冠牧場ニ入り農業牧畜ノ現術ヲ修業シ十六年止ム二十年今ノ平賀村ニ地ヲ相シ土地貸下ヲ受ケ自ラ精勵憤勉開墾ニ從事シ實ニ星ヲ戴テ出テ月ヲ踏テ入り翌二十一年ニハ二十餘町歩ヲ開耕シ傍ラ牧畜ヲモ志シ今馬四十餘頭ヲ有スト二十三年村總代ニ公撰ス氏ノ堪忍力行ナル皆嘆稱セサルハナシ

平賀村

互野 留作 文政十二年四月四日生

氏ハ元ト陸中國東閉伊郡ノ人世々農ヲ業トセシ

ガ家極メテ貧シキヲ以テ安政五年志ヲ決シテ本道ニ渡リ今ノ膽振國白老郡ノ地ヲトシ荆蒔ヲ伐リ開發シ諸作ヲ試ミタルニ地味良カラサルヲ以テ明治三年現住ノ平賀村ニ地ヲ求メ移住専心一意開墾ニ從事シ土地膏腴ニシテ氣候亦溫暖ナルニヨリ水田ニ適スルナラント四年水田一町歩ヲ開キ試作セシニ頗ル能ク稔リシヲ以テ爾後毎年作付ヲナシ今ハ田一町五反歩畑十町歩ヲ耕シ馬三十餘頭ヲ飼育シ又菓木夥多ヲ栽培シ一家舉テ常ニ勤勉精勵スルヲ以テ收穫殊ニ豊カナリト氏ハ地方米作ノ元祖ニシテ且ツ能ク稼業ヲ勉メ農家ノ好摸範タルベキ人ナリト云フ

平取村舊土人

ヘンリウク 天保三年一月一日生

ヘンリハ和語ヲ巧ミニシ能ク古事ヲ説ク元平取

村舊土人ノ酋長タリシガ年老ヒタルヲ以テ罷ム
遊歴者皆ナ此ノヘンリヲ訪ハサルモノナシ曾テ
小松宮殿下御巡遊ノ際此家ニ御休憩アリヘンリ
最モ之ヲ榮トス又來訪者ノ名刺數十枚ヲ有シ常
ニ人ニ誇示ス前年英人バデロー永ク此ノ家ニ寓
シ土人語ヲ研究セリト

平賀村舊土人

イモンハウク 天保二年
一月八日生

イモンハハ彫刻即チアイヌ細工ヲ能クシ益或ハ
小刀鞘等ヲ造リ波紋或ハ魚鱗ヲ鏤ム其技甚タ巧
ミニシテ初ヨリ下圖ヲ画カス意ニ任セ刀ニ隨フ
テ彫刻ス紋様浮出シ最モ佳趣アリ札幌縣ノ時イ
モンバノ四字ヲ刻セシ烙印ヲ賜ヒ其後製作セシ
モノハ裏面ニ此ノ印ヲ烙ス今眼ヲ病ミ刀ヲ手ニ
セスト云フ

明治二十五年八月卅一日印刷
同 二十五年九月十日出版

(非賣品)

著述者
兼發行者

北海道土族

御子柴 五百彦

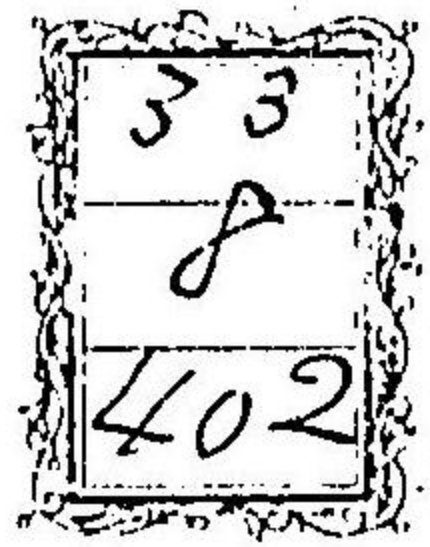
日高國浦河郡浦河村
五十二番地

北海道平民

高野 圓平

渡島國函館區旅籠町
十七番地

印刷者
印刷所 函館辨天町五十三番地
巴 港 社



IT-3Y-66

000

33

402

日高国志料

沙流郡之部

国立国会図書館

023227-000-9

33-402

日高国志料 沙流郡之部

御子柴 五百彦 / 著

M25

ADC-0068

